

## 善説集に示されたる密教的學道（一）

高 田 仁 覺

西紀第九世紀以後の編纂と見られる善説集（*Suhastisa-sastra*）は、各種文獻資料の一部抜粋を順次に集録することによつて、一つのまとまつた論述を展開しているものであるが、その引用出典の種類や内容から判断すれば、それは印度密教學道に關する一つの綱要書であると見られる。

今ここに紹介しようと思ふのは、その中最初の部分五十數偈に就てであるが、それ等の斷片は殆どが密教關係の文獻約十四の中から抜粋されたものである。そして、その内容は、(1)密教學道の第一要件として、弟子たらん者は必ず師（*guru*）に仕えねばならぬこと。その場合、(2)弟子（*discipula*）は師及び阿闍梨（*acarya*）に如何に仕えるべきであるか。(3)又密教に於ける師及び阿闍梨は如何に遇せられるか。更に、(4)密教に於ては、師は弟子を如何に指導すべきであるか等の諸點を示したものである。

さて、印度密教のこうした問題に就て *S. B. Dasgupta* 氏 *An Introduction to Tantric Buddhism* 一七四頁以下の指摘する所に依れば、「密教に於ては、覺は修行なしには得られぬとするから、瑜伽の修習こそは菩提心を獲得する爲に不可缺のものである。而してその場合最も重要なのは、善き師を選んで仕えることである。何となれば、行者が眞實（*catvra*）を得るのは、讀誦することや苦行に

よつてではなく、又無量の行を積み、努力することによつてでもなく、師の恩恵によつてであるからである。それ故、師の恩恵なしには、眞實は決して得られないことが、密教に於ては繰返し繰返し述べられるのである。又印度固有の宗教は、ペーダ時代から近代に至るまで、儀式的なある種の行を包含している。密教もそれと同じ傾向を有するのであるが、このような宗教に於ては、師が重要視せられ、しばしば師は神それ自體よりも重く遇せられている。それは、神とは何ぞやということを入々に知らしめるには、師の實際的教導を必要とし、それなくしては、神は人々にとつて虚構なものになつてしまふからである。又一般にタントラは宗教の行的面を最も強調するが、それ等の行は極めて秘密的であり、複雑であるから、各段階に於て精神的にも肉體的にも踏み違ひを起し易い。若し、これ等の行が組織的に適當に行せられるときには、眞實の實現によつて人々を最勝なる心的展開へ導くであらう、之に反し若し熟達せる師の教導によつて注意深く行せられないならば、それは困難にして危険なものとなるであらう。これタントラの殆どすべてに於て、最初の章を善き弟子と善き師の結びつきに當てている所以である。而して、印度のこの教師論は非常に古い時代に淵源し、タントラ時代に最も強調されたのであるが、それはまた印度のすべての宗教にも

流れ込んだのである。」と。

以上、S. B. Dasgupta 氏が論述せる如く、密教は印度教教的なものを多く受け入れたために、上述の如き師弟観を有つようになつたと思われるが、善説集に於て、それがどのように具體的に示されているか次に紹介して見よう。

(1) 密教的學道に於ては、先ず弟子は師に仕えねばならぬこと。

眞實の寶は不可言にして、自内證せらるべきであるから、言語のみによつて得ることは出来ない。それ故、佛陀は數多の經中に眞言行等の方便を、次第して説き給うたのである。即ち、この眞實の寶は所相能相を離れているから、聞等の識によつて解了せらるることは決してない。相を離れているから、それを了承するためには、諸の善き弟子達は善き師に仕えなければならぬ。師に仕えずしては、幾億劫を経て眞實の寶を得ることは出来ない。従つて悉地(Siddhi 三)もあり得ない。善き師とは無分別處に住し、智と方便の義をよく説く者である。又諸の阿闍梨にも悉地を得るためによく仕えねばならない。次いで一切の佛に歸依しなければならぬ。それによつて無邊の菩提なる安樂を得ることが出来る。

(2) 弟子は師及び阿闍梨に如何に仕えるべきであるか。

師は佛子に對し慈愛の心を有しているのであるから、弟子は師に對して悪い意樂をもつて近づいてはいけぬ。求める眞實の寶を得るまでは牛乳等の布施による無量の供養によりて善き師をあくまで敬重すべきである。次に一切の佛の功德藏である眞實の寶を得んとすれば、恐れることなく自らの過失を尋伺し、師に問わねばならない。若し、三寶や悉地の教授者たる師を害したり、諸の瑜伽者や法性に反對するような非難の心があれば、その者は金剛薩埵の本誓

によつて、却つて自らが恐怖をうけるであろう。師を敬重しても速かに饑益してもらえないとて、他に歸依し、師の缺點を言いふらすべきではない。又阿闍梨が眞に瑜伽者であると如何にして知り得るであろうかという點のみに心を奪われて、佛果を熱心に願うことを忘れる者がある。又漸くにして眞實の智を得るや、その恩師に留意せず、我こそは智者であると自ら恃む弟子がある。中には、「この獻じ物をお取り下さい。もはや私は貴方の弟子ではないし、貴方は私の師ではありませんよ」と獨立してしまふ弟子がある。かかる者は無上者ではない。又師を誘惑しようとの心をもつて欺く人々がある。このような弟子に如何にして安樂や悉地が得られようか。金剛薩埵は是の如き自利利他に背いた悪性の人々に對し、「汝等はその業によつて、自らの厭う地獄に生れ、やがては忍び難い苦を受くることになる」と説かれたのである。

そこで、眞實の菩提を得んと願う弟子等は嫉、我慢、慳、奸猾、欺騙及び悔の諸想を捨て、泣き悲しんでいる人の他を恐れしめないような態度をもつて、根本眞實を成就せしめる導師である師を敬まわねばならない。即ち自己を顧ず、先ずマンダラを禮拜し、次いで一日に三時以上師の御足に禮拜すべきである。そうすれば、師の上積集せる佛の恩寵に依り、三世の等覺者の心をもつて、師が説示する最勝眞實を障礙なく得ることが出来るであろう。又勇猛なる弟子が憍慢、欺騙等の一切の障を捨てて、佛陀の教法を具有する師に絶對の信を以て歸依するときには、一切の勝者たる善逝者達が得たる最上菩提を成就すると共に、弟子の有する勝者の功德庫は轉じて眞實の寶となるであろう。

(3) 密教に於ける師及び阿闍梨は如何に遇せられるか。

一切有情の知り得ない最勝眞實は疑もなく師の口より傳授される。又三界の一切有情中阿闍梨より尊い者はない。何となれば、阿闍梨は佛の恩寵を藏し、それに基いて眞實を説き、弟子はそれを聞いて多くの悉地を得るからである。それ故弟子は他への一切の供養を止めて、専ら師を供養すべきである。それに對し、師は最勝なる一切智を得せしめる。又弟子は金剛薩埵なる阿闍梨に對して、無上なる供養のみでなく、他の福或は苦行等少しでも勝れたものすべてを布施すべきである。それに對し、阿闍梨は弟子達の罪業を取り去つて、恐怖を除き、苦の大海から彼岸へ救い上げるのである。實に金剛薩埵以外に一切を統括する最高神として自存するような一世尊というものはないのであつて、ただあるものは教法を授ける多くの金剛薩埵のみである。石や木で作られた佛も有情に對して解脱を與え給うのであるが、この世の姿をもつた者ではない。この世の姿に於て、永遠の安樂を與える者は師である。師の上にある佛の恩寵より最勝眞實の三寶が得られるから、師はまた佛でもあり、法でもあり、僧でもある。弟子は甘露という不死の教を早く師から得て飲まなければ、遂に死なねばならぬであらう。それはあたかも沙漠に於ける隊商の如くである。その甘露は讀誦せられ、解釋敷衍せられ、説示されるものではあるが、哲學的見解ではないから、それだけに容易に知ることが出来ない。然し一たび敬の御足に敬禮することによつて、それは可能である。若し、舟の如き救度者であるこれ等諸の師が、生死輪廻の恐しい境界にあつて、不運の時が來たならば、遂には死の大海に臨まねばならない者であれば、亂れた綱網の如く混亂せる、多くのよくない分別ある諸の衆生は、如何にして最勝安樂なる佛果に至り得ようか。師はかかる者であるから、大痴者

にして師の教を學ばず、行き過ぎた行爲をしたり、たとい學んでも、師の教に背いたり、僞つて師に尊敬を示したりする者はいづれも地獄に墮すのである。是の如く知つて、師の教を守る弟子はやがて悉地を得、正智の遍照者となるであらうが、そこに於ても阿鼻地獄を捨てた因となつた師に對しては、尙も禮拜すべきである。

(4) 密教に於ては、師は弟子を如何に指導すべきであるか。

「師となる者は、努めて明かに諸の弟子たらん者を熟知した上で、適當に指導者となるべきである」と牟尼は説き給うた。實に師は弟子の性質をよく知つてこそ教え得るのである。けれども、愚者は阿闍梨として弟子達を饒益する資格はない。又弟子を導く場合、利益になることは何でも行わるべきである。何となれば、善法は決して器たる弟子を障害しないからである。そこで、最初に眞實を探究する人と共に、「一切は實有である」と説一切有部の教が語られるべきである。次いで、義が理解せられた人と共に、「無執著の上に樂寂がある」と語らるべきである。更に福を欲する人と共に、「一切は空性である」と中觀の教學が語らるべきである。が、決して「一切種に空である」と語らるべきではない。若しその如く語られるならば、毒と藥とが一緒になつたと同じではなからうか。邪しまに判斷された空性は愚者の知識をこわす。例えば、悪く捉えられた蛇の如く、悪く極成された學説の如くである。又自ら知識ありと思つてゐる愚者は、この空性を知ることが困難であるから、矛盾によつて破壊せられ、さかさまに無間地獄へ落ちて行くであらう。そこで、方便をよく知る者が師となつて、種々の方便によつて未だ覺らない有情を導くことが必要となる。その場合、邪惡なる有情に對しては、熱心に憐れむべきである。例えば、病氣の子に對し、母は特

別に思い悩むように、諸菩薩もまた邪惡なる有情に對しては、特に憐れみが生ずるのである。先ず、弟子が自由なる意見をもつことを、一切諸佛は許し給わないのである。何となれば、盲いたる自由意見の山に登ることは、弟子にとつて、決して善いことではないからである。けれども、阿含を觀察するときには、自由なる意見をもつことを許される。それは一切の阿含の中に出てゐる知識は觀察されたものに過ぎないから、「實際的修習によつてこそ、初めて自分のものとなるであらう」と勝者たる佛は宣給うたのであると知つて、やがて修習することになるであらうからである。次に怠惰にして、師を非難する弟子は師から灌頂(手引き)を得ても、欺騙の覺知となつてゐるから、心が傲慢となる。又このような無頼の心ある者は、一切智性を得難いから、師の諸の過失を見出ししても、諸の功德を見出さないであらう。又師より眞實を聞こうとしない怒りの心あるこれ等の人は、容易に眞實を得ないから、佛を讚歎する語をさまたげ、太陽の如き師を見ては、顔をそむけ、師が靜閑處に住するときにのみ敬禮するであらう。このような不義なる惡しき弟子に對しては、師は自分の實子の如く非難すべきである。同様に農夫たる吠舎の人も師の面前では、婆羅門の如くでなければならず、決して英雄の如くであつてはならない。之に反して、智慧ある弟子が善功德と結びつき、よく精進するならば、尊ぶべき佛陀の法をよく解了するのである。又教法に就て人々によく淨明にするならば、彼の鉢は恵み深いものとなるであらう。又尊ぶべき者を敬信すれば、多くのタントラを聞き、阿含によく精通し、眞實の教に達するのである。けれども、ただ論に練達であるならば、何等自利とはなり得ないであらう。何となれば、論はただ疲勞の因となるに過ぎないから

である。かくして、眞實の教に達し得た者は幸であるが、語義に執着して眼を閉ぢ得ない者は愚者である。然し、教説に於て語の功德を全く無視する者は、覺慧がばらばらになるのであつて、同様に輕蔑に値するのである。かくの如くであるから、多くのタントラを聽聞した智慧ある者は、聞、慧、堅持、聰明、精進及び圓滿具足という六句を知る。而して尊ぶべき者への敬信によつて眞實の教を得た者はタントラ王の教を語ることが出来るのである。實に、煙ある所に火あるを知り、乃至諸の相によりて種姓が知られる如く、知慧あるより菩薩となるべき弟子を知る。師はそのようなよき弟子の上に、極めて淨明なる極樂の蓮華が、歡喜のためにかすかに開敷せるを見たならば、無自性空という勝義諦なる眞實の教を以て弟子を饒益すべきであると。

(昭和二十八年度文部省科學研究費による研究の一部)